

Case Study キヤノンマーケティングジャパン

# 基幹にオールフラッシュを採用 高い性能が事業の成長を支える

キヤノン製品の国内での販売やマーケティングを担当するキヤノンマーケティングジャパンは、東芝ソリューションが提供するオールフラッシュタイプの「フラッシュアレイドレージ FL6000」を基幹ストレージに採用。これまで課題となっていた性能問題の解消と運用負荷の軽減を実現した。



性能に余裕のあるオールフラッシュを採用して正解でした

**菩提寺 淳一氏**

キヤノンマーケティングジャパン株式会社  
IT本部 コンピュータインフラ第二課 課長

Profile

**Canon**

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

●本社：東京都港区港南2-16-6

●資本金：73,303百万円

●事業内容：キヤノン製品ならびに関連ソリューションの国内マーケティング

「オールフラッシュタイプが今後の主流になることは明らかでしたし、最高レベルのアクセス性能を必要としていたこともあり、思い切って基幹ストレージに導入しました」。こう話すのは、キヤノンマーケティングジャパンでITインフラの導入と運用を担当する菩提寺淳一氏だ。

パソコンのストレージはHDDからフラッシュメモリへと急速に置き換わっているが、エンタープライズ分野では大容量化を図りやすいHDDが依然として主流だ。最近でこそHDDとSSDとを組み合わせたハイブリッドタイプが広まりつつあるが、すべてをフラッシュメモリで構成したオールフラッシュタイプは主にサブシステム用としての導入にとどまっており、基幹ストレージとして使われるケースはまだ少ない。

キヤノンマーケティングジャパンはそうした状況の中、2014年秋に基幹ストレージを一新し、従来のハイブリッドタイプに代えて最新のオールフラッシュタイプを導入した。採用した製品は、東芝の「フラッシュアレイドレージ FL6000」である。

## 最高レベルの性能を求めて オールフラッシュタイプを選定

キヤノンマーケティングジャパンがオールフラッシュタイプを採用した背景のひとつが旧基幹ストレージの性能問題だった。2010年の導入当初は性能に余裕のあったハイブリッドタイプの従来ストレージも、業績の伸びや事業分野の拡大に伴ってトランザクションが集中するにつれ性能低下が顕著となり、出荷指示のバッチ処理が間に合わなくなったり、バックアップ処理が規定時間を超えてしまうような事態が起きるようになっていたという。

運用負荷も問題になった。

「出荷が遅れが生じるとお客様や取引先にご迷惑をお掛けしてしまうばかりか、原因を調査・分析して社内の関連部署に報告し対策を進めなければならず、とても手間のかかる運用を強いられていました」（菩提寺氏）。

そこで社は基幹ストレージの更改にあたって、今後5年間の成長にも対応できる要件を東芝ソリューションを含むベンダー各社に提示。

## パフォーマンス、運用性が大幅改善

キヤノンマーケティングジャパンが既存のハイエンドストレージをフラッシュアレイドレージにリプレース。



東芝  
フラッシュアレイドレージ FL6000

ストレージレイヤでの応答性能が**10倍**に  
(既存のSSDストレージとの比較)

アプリケーションの応答性能が**2倍**向上し、  
繁忙期のバッチ処理遅延を解消

機器設置面積**24分の1**に  
(3ラック→6U)

フラッシュストレージの「運用管理ソフト」  
により、性能の  
**モニタリングがリアルタイムで可能**  
になり、ストレージの運用性が向上

消費電力**75%**削減

各社の提案の中から、要件を超える最高レベルの性能、エンタープライズ市場での実績、使いやす機能が豊富な管理ツール、省スペース化や省電力化の実現、およびメモリ素子を自社で製造していることによる信頼感といった特徴を備えた「フラッシュアレイドレージ FL6000」が選定された。

「フラッシュアレイドレージ FL6000」は東芝製NANDフラッシュメモリ素子をアレイ構成にして内部を高速バスで接続した、オールフラッシュタイプのストレージ製品で、従来のHDDストレージを大幅に上回る毎秒100万アクセスもの高い性能を実現していることが最大の特長である。

性能だけではなく、vRAID (バイオリンRAID) テクノロジーによる冗長性や最新のウェアレベリング (書き込み回数の平準化) によるメモリ素子の長寿命化など、エンタープライズ用途に応える信頼性や運用性も確保されている。

すでに流通系大手企業や通信系大手企業への導入実績があり、いずれも従来ストレージに比べて大幅な性能アップをもたらしている。

## 基幹システムの性能問題を解消 運用管理負荷が大幅に軽減

同社はおよそ一か月のデータ移行期間を経て2014年11月後半に「フラッシュアレイドレージ FL6000」の運用を開始した。

同社でITインフラの運用にあたっている三船晃氏によると、オールフラッシュタイプの特長である性能の高さはすぐにメリットとして表れたそうだ。「業務アプリケーションから見てバッチ処理時間は平均12%短縮され、ユーザーレスポンスは2倍以上に高速化されました」。ハイブリッドタイプに比べて構成がシンプルで、しかも管理ツールが使いやすいため、運用業務が楽になったことも評価しているという。

構成がシンプルで管理ツールも使いやすく、運用が楽になりました



**三船 晃氏**

キヤノンマーケティングジャパン株式会社  
IT本部 コンピュータインフラ第二課

また菩提寺氏は、「従来課題となっていた出荷指示処理の遅れなどが一切なくなり、業務の滞りや運用の負担から解放されたことが最大のメリットと感じています」と、大幅な性能余裕のあるオールフラッシュ・ストレージの採用判断は正しかったと述べている。

さて、キヤノンマーケティングジャパンはビジネスの成長や変化に即応できる次のITシステムを目指して新たなブランドデザインを検討中である。フラッシュメモリ技術、メモリ素子、ストレージシステム、および、活用技術のすべてを持っている東芝は、ビジネスの変化を支えるITソリューションプロバイダとして、これからも同社の期待に応えていく。

お問い合わせ先

**TOSHIBA**

〒212-8585 神奈川県川崎市幸区堀川町72-34 (ラゾーナ川崎東芝ビル)  
東芝ソリューション株式会社 経営企画部 広報担当 TEL. 044-331-1100  
<http://www.toshiba-sol.co.jp/>

安心、安全、快適な社会。  
**Human Smart Community**  
by Ikenology - the technology life requires